

千葉県立美術館報

VOL. 2 NO. 4

昭和51年3月1日発行  
編集・発行人 松戸 節三

〒280  
千葉市中央港1丁目10番1号  
☎0472-42-8311(代表)

# みる つくる がたる



1975年のグレーの洗濯場

## 観潮台

### 写生地

太平洋に面した、千葉県鴨川市の波太(なぶと)海岸、さらに、三重県の大崎に近いい波切(なぎり)海岸は、ともに絵のために形成されたような景観が展開し、日本美術風土記では無視できない写生地だといえる。

なかでも、東京都に近い波大海岸は、前面の海に仁右衛門島が浮かび、その海に大小の岬が岩礁とともに点在し、さらに、民家と山が海に迫るといふ雄大な自然である。

この海岸のホテル江沢館には、太平洋画会の石川寅治や中川八郎らが、大正二年に画家としてはじめて写生地を選び宿泊してからの、多数の画家の小品などが数百点も記念に保存され、年輪を秘めた何冊もの宿帳までがあり、画家の宿を感じさせ、東の波太に西の波切」という画家のことはの背景を知らされる。

こうした写生地の所産としては、なんととっても安井曾太郎が、昭和六年に江沢館で制作した「外房風景」が、現在までの代表的な存在ではないだろうか。

(在)

# 館長室雑感

館長 松戸節三



月日の経つのは早いもので、この美術館に通勤するようになってから満二ヶ年になろうとしている。昭和四十九年四月、展示棟の一室を仮事務室にあて、館長以下十四名が、曲りなりにも執務できる体制を整えて機関運営が始まった。

第一から第七まである展示室の中では一番小さい第六室を事務室に充てた。展示室特有のただっぴろい空間に小じらまりと庶務・学芸の二課がおさまった。

館長の机はその室の奥まった一角にポツンと置かれ何と

も寒々しい。ビニールタイルの床はまだ乾燥しきっていないためひどく冷える。四月も下旬だと言うのに膝から下が冷えてたまらない。とうとう家から石油ストーブを運びこんで机の横に置き、そこで読み書きをする始末であった。そんな中で職員の本会議をしばしば開くようになり、十月二十三日に予定されている開館準備のことや美術資料の購入等について館員の相互理解につとめた。

十月二十三日開館式。翌二十四日から第二十六回千葉県展開幕。十一月十七日まで一日平均七一〇人、一万四千二百人の入館者があった。

あれから一年三ヶ月、その間企画展十回、団体展三十回、入館者延べ十五万名に達しようとしている。しかしこの数は決して多いとは言えない。若しこの美術館が市の繁華街にでもあったらなあと、足の便の悪さが惜しまれる。

この美術館から九百米離れた千葉市役所までは、京成・小湊・中央の三社の路線バスが運行されている。この三社に対し、美術館までのバス運行を陳情すること久しいが未だにそれが実現しない。しか

し最近になって、日曜祭日だけでも運行しようという気運にあるようだ。一日も早く実現することを願っている。

千葉駅から京成千葉駅経由美術館ゆきバスが往復してくれば、美術館職員はさておき展覧会観覧者に便すること夥しいと思う。

つぎに、この美術館には友の会というものがある。美術館設置二年目の昭和五十年五月頃から本格的な会員募集が始まったが今では五百名近い会員がいる。

企画展の都度、会員のために展覧会の解説会を開く、美術館の職員が交替で解説者となり、その展覧会の作品作者について解説をするのである。

又昨年は十月十二日に友の会がバス旅行を企画し、東金成東方面の古美術と文学のあとを訪ねた。大型バス満員の参加者があったが、生憎雨にたたられた。昭和五一年度は五月に予定されている。

美術館の大きな仕事の一つに美術品の収集がある。まだ美術館の建設工事も始まっていなかった昭和四十三年から昭和五十年年度まで毎年少しずつ収集して目下二〇〇点弱の日本画・洋画・彫刻・工芸・

書・版画等がある。これらの収集品の中には、県からの保管換作品や寄贈寄託作品が含まれている。

将来は、美術館の所蔵作品で立派な常設展が開けるようになることが課題であり目標である。

この美術館としては、本県に最もゆかりのあるわが国洋画界の先覚者と言われる浅井忠とその師弟の作品を中心に収集してゆく方針である。

三月二日から四月十一日まで、特別展として「浅井忠とその師弟展」を開催する予定で、目下その準備に忙殺されている。

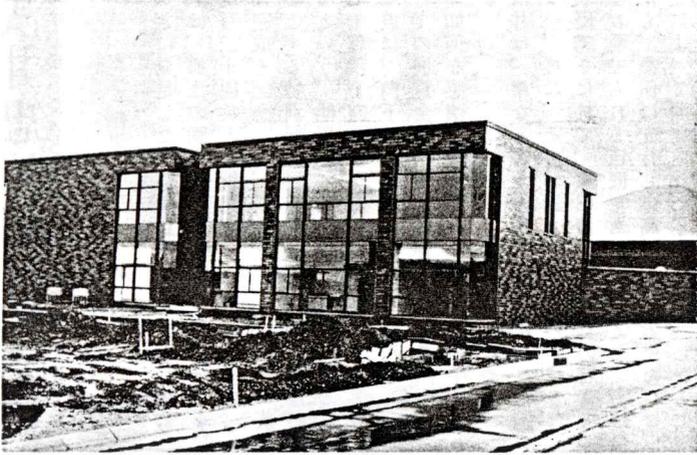
又この展覧会は、管理棟完成記念展でもある。

昭和四十八年末の石油ショックの影響もあって大幅に遅れていた管理棟が二月中に完成する。

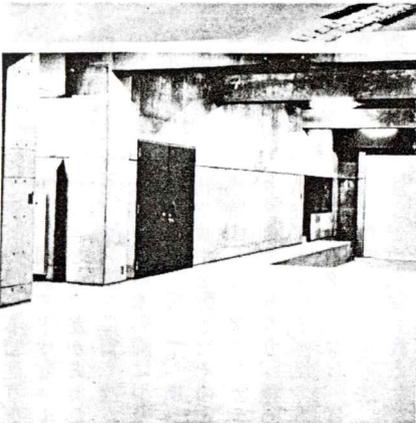
思えば、仮事務室での二年は長いようで短かった。三月からは、事務をとるための施設設備の整った管理棟に移れる。

過去二年間いろいろな不便をしのいで精動してくれた職員に敬意を表しながら、今後一層県民サーヴィスに徹して頑張っしてほしいと思う。

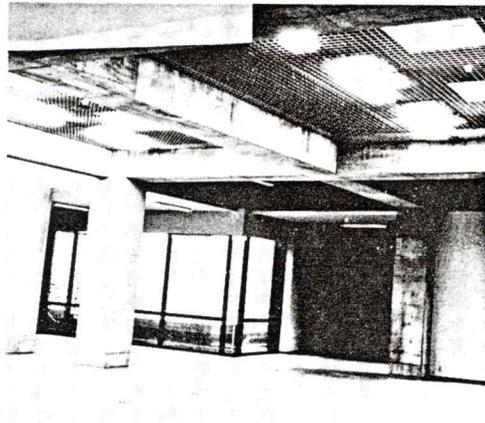
# 管理棟完成 機能化する



管理棟全景



荷解場



研究工作室

待望久しかった第二期工事の管理棟が漸く完成した。五十年三月着工以来約一年の工期で二月二十日予定どおりの完成である。

鉄筋コンクリート二階建、延面積二、二七五平方メートル、工事費四億三千五百七十万円で、外壁は展示棟にあわせた常滑焼の特殊練瓦で、間にガラス壁面を組入れた重厚でモダンな建物である。

一階は受付、警備員室、宿直室、用務員室、医務室、会議室、更衣室等の管理機能面と、作品搬入室、荷解梱包室、審査室、資料倉庫、荷解梱包保管室、消毒室等資料搬入と整備機能を備えた一、一八六平方メートルであり、二階は館長室、副館長室、応接室、会議室、庶務課、学芸課の各事務室、学芸相談室、研究工作室、写真スタジオ、収蔵庫等、事務室と作品の管理を主体とした一、〇八九平方メートルから成っている。

将来を見越した余裕のある間取りであり理想的な運営ができるものと期待している。

管理棟建設に伴う周辺外構の整備については、財政事情の厳しい状況下であり充分とはいえないが、一千八百万円

の子算が計上されているので管理棟にあわせて駐車場その他の外構を整備中である。美術館的な環境にするには、なお相当の経費が必要であるので年次計画により整備をはかっていきたい。

教育棟（仮称）の建設については、皆様の一番期待の大きい施設であるので早期完成に努力してきたが、このようなきびしい経済状況となり、今すぐには無理となった。しかし、当局の御理解により、新五カ年計画に認められ組み入れられたので一日も早く完成されるよう努力したいと思うので、皆様方の御支援と御協力をお願いしたい。

今後の館運営については、管理棟の完成により、展示室がフルに活用できること、管理棟の利用方法を工夫することによって、教育棟的な機能もできるだけ取り入れて、各種企画展、団体展を始め、講演会、講習会、解説会、実技講座等幅広い活動を展開したいと考えているので、皆様方の美の広場として大いに御活用願ひ、美術館の発展のために心暖まるご援助をお願いする次第である。

# 浅井忠特別展に際して

隈元 謙次郎

さきに発足した千葉県立美術館は、郷土の画家浅井忠の生誕百二十周年と、管理棟の建築完成を記念して、浅井を中心とする特別記念展を開催するといふ。他界して間もなく七十周年を迎えようとしている彼は、門下の俊秀たちを率いての展覧会に、天上に存つて如何な感懐を抱くであらうか。

浅井は、単なる郷土作家ではない。彼は、その業績と作品の優秀さに於て、黒田清輝と並び称せられる巨匠である。しかも、黒田に先行して高橋由一によって開発された写真主義絵画に、独自の抒情性を加え、異質の洋画をまことに無理なく日本化して、われわれを心おきなく美の世界へ誘いこむ。それは、稀に見る浅井の資質であつた。

浅井は、一八五六(安政三)年江戸の佐倉藩邸内で生まれた。幼くして家督を継ぎ、少年時代を佐倉で過した。時の藩主堀田正睦侯は、英明の君主であり、幕末には老中をつ

とめ、洋学にも理解を示した。

浅井は、少年時代日本画や書道を学び、また武道にもはげんだが、次第に西洋文化への傾斜を深めて行つた。一八七二(明治五)年頃、再び上京して英学や漢学を学んだが、一八七六(同九)年国沢新九郎の門に入つて、はじめて洋画の手ほどきを受けた。国沢はやくロンドンに留学し、正式に洋画を学んだ人で、その彰技堂は、習学用の西洋彫刻の石膏像や画書なども備えた。当時最も整つた私塾であつた。

しかるに、此の年十一月政府が創立した工部美術学校に入學した。ここには、画学科と彫刻科が置かれていたが、浅井は画学科に入り、イタリヤから招かれたアントニオ・フォンタネージの指導を受けることとなつた。フォンタネージは郷国で研究したばかりでなく、スイスやフランスにも度々赴き、ロマンテック・リアリズムと呼ばれている一八三〇年派(バルビゾン派)

の野外に於ける自然写生に共鳴し、同派のドウビユーやラウイエとも交友があつた。また、ロンドンに暫く滞在してイギリスの水彩画についても研究した。従つて、風景に人物や牧牛を配したその作品は当時のイタリアのアカデミックな画風と異なり、極めて抒情性にあふれる画風であつた。フォンタネージは、洋画の基本的な技法や遠近法、陰影法などの理論も教えたが、これに加えて、彼の浪漫的な画風が学生たちに与えた影響は大きかつた。中でも浅井はこの精神と画風を最もよく承け継いだ画家であつた。彼は、国沢塾で初歩的な技術を学んでいたので、直ちに本科に編入されたが、此の時代すでに多くの学生の中で頭角をあらわし、在学中小山正太郎や松岡寿らと共に、賞として舶来の油絵具一式を授けられ、また選ばれて女子学生の指導にもあたつた。

しかるに、フォンタネージは不幸に健康を害し、しかも西南戦役のためわが国の経済事情が悪くなつたために、工部美術学校の校舍新築も不可能となつた。そのため、失望した彼は三年間の契約期限を

またずに、一八七八(同十一)年九月満二年の在日の後日本を去つた。浅井たちの失望は大きく、後任教師にあきたらずに、この年十一月小山、松岡など十一人と共に退學して十一字会という研究会をつくつて、互いに研究にはげんだ。

この時代に、浅井は一時東京師範学校に教鞭をとつたが、東京近郊はもとより、大菩薩峠や日光、房州などに旅行して写生している。この時代、油絵作品は少ないが、鉛筆画や水彩画を描いていて、師フォンタネージの画風をよく伝えている。また、小学校の習画帳や英文の日本風俗画集(高橋源吉と共編)なども刊行している。

浅井たちが十一字会を結成していた明治十年代は、一方でわが伝統美術の復興運動が盛んとなり、また富国策として殖産興業がしきりに唱えられた時代で、そのため漸く移植された洋風美術は官民の圧力を受け、工部美術学校は廃止され、一八八七(同二十)年創立された東京美術学校もはじめは日本画、木彫、伝統工芸だけが教課として採用された。これに刺激された浅井をはじめ小山、松岡、本多錦

吉郎、山本芳翠、五姓田義松原田直次郎などは一八八九(同二十二)年明治美術会を結成した。これは、わが国最初の洋風美術団体で、当時の知識人多数を賛助会員とし、全国の洋画家、洋風彫刻家を会員として発足した。そして、同年第一回展を開いて以来一九〇〇(同三十三年)に至るまで展覧会や講演会、討論会を開いた。また旧作の常置展観場や明治美術学校を設けて、洋画教育も行つた。

浅井は、評議員として会の運営にあたり、また明治美術学校の教授にあたると同時に展覧会ごとに優れた作品を発表して、この会の頭梁と呼ばれた。そのはじめ頃の展覧会に発表した「春敵」と「収穫」終り頃の「漁婦」は、共にこの時代の代表作であつて、いずれも褐色を主調とし、後の黒田の紫派に対して脂派と呼ばれた。

一八九四(同二十七年)年九月から十二月にわたつて日清戦役に従軍して、朝鮮から満州に赴き、油絵大作「旅順戦後の搜索」「露営」などのほか水彩画、素描淡彩の「天長節祝宴」など多数の作品を描いた。これらは、石版画帳「従

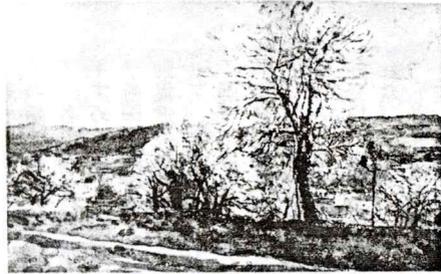


旅順戦後の捜索

征画稿(四冊)に収めて刊行した。また、この前後には「中学画手本」「彩画初歩」「彩画入門」などの画学書を執筆、刊行している。

一八九六(同二十九)年東京美術学校に西洋画科が新設され、黒田がまず指導者に起用されたが、浅井もまた一八九八(同三十一)年同校教授に任ぜられ、翌年には東京高等師範学校の講師を委嘱された。しかるに、彼は文部省から西洋画研究のためフランスへ満二ヶ年の留学を命ぜられた。一九〇〇(同三十三)年

二月出発して四月パリに入った。この年、パリでは万国博覧会が開かれ、わが国からも新古の美術品が出品された。この好機にわが国からパリに集まった美術家は多かつた。浅井はこの博覧会の日本側の嘱託も兼ね、また「海岸」を出品して、つぶさに欧米の美術や美術工芸品を視察して大いに得るところがあつた。



春

パリに来て暫くの間はルーヴル博物館やセーヴル製陶所あるいは美術学校の訪問で忙しく、絵筆をとることは少なかった。この年六月ごろ新しく画材を整え、パリの街角や公園などを描きはじめた。つづいてブローニュの森やヴェルサイユなどで戸外写生を試み、またフォンテンブローやグレー村にも度々出向いて製作したが、一九〇一(同三十四)年十月、和田英作とグレー村に赴き、そのオテル・シュウイヨンに翌年三月まで滞在して油彩や多くの水彩画を描いた。グレーは約十年前若い黒田清輝が三年の間住んで数々の作品を描いたところであるが、パリの南郊七、

八十軒、ロアン河に添った寒村で、中世の石造教会堂や城跡、古橋があり、河辺にはいくつかの洗濯場がある。またポブラ並木や麦畑や牧場がある。

浅井は、この五ヶ月余りのグレー滞在中、むさぼるように描きつづけ、幾多の佳作を生んだ。油絵には「洗濯場」「グレーの秋」「グレーの柳」「西洋婦人像」「樹下の女」「農婦」などがあり、水彩画には「春」「山羊」「グレー古橋」「グレーの橋」「冬木立」など多数の佳作がある。この時代には従来の褐色調の色調から、印象派風の明るい画風になり、色彩も豊かになっている。

グレー村から三月中旬パリに帰った浅井は、五月から六月にかけてイタリアを巡遊しトリノ、ローマ、ナポリ、フィレンツェ、ヴェネチアなどに於いて優れた水彩画を描いている。その後、ウィーン、ミュンヘン、ベルリン、ドレスデンなどを巡ってパリに帰った。六月下旬ロンドンに赴き、数日中を留学中の夏目漱石の宿で過ごし、八月下旬海路帰国した。

浅井は、同年九月新設の京都高等工芸学校の教授に任ぜ

られ、京都へ移った。これはパリで同校校長に内定していた中沢岩太の懇望によるものであった。同校では教頭として中沢校長を助けたが、自らも油絵、水彩画と共に工芸品の図案を描いた。一方、京都洋画壇の要望によって聖護院の自宅に研究所を開いたが、研究生の増加によって、住友家の援助と中沢、伊藤快彦、鹿子木孟郎などの協力によって関西美術院を開き、その初代院長となり、多くの青年たちを指導した。この時代の油絵作品には、「中沢岩太像」「木下広次像」「婦人像」「老母像」などの人物画のほか、「画室」「花鳥」「曼珠沙華」「八瀬の秋」などがあり、水彩画には「淡路島」「聖護院の庭」「琵琶湖」や北陸海岸、吉野、初瀬、飛弾、木曾方面の多くの写生がある。

しかし、この時代の彼が最も力を注いだのは、東宮御所御造官局から委嘱された同御所(のち赤坂離宮となり、現在迎賓館となる)の東二間の緞織壁飾の下絵「武士の山狩」の製作である。彼はそのために多くの素描、水彩画、油絵による下絵をつくり、一九〇六年に至って油絵下絵を



武士の山狩下絵

完成した。これは、川島甚兵衛によって緞織に織られ、壁画を飾っていたが、第二次大戦の戦禍によって大きな損傷を受けとりはずされた。

浅井は、京都時代陶器に興味を見出し、いくつかの作品を作っている。また大小の日本画の遺作も多いが、これは彼の無聊を慰める余技であつた。

一九〇七(同四十)年文部省美術審査委員会委員に選ばれ、その第一回展覧会の審査にあつたが、帰京して発病京都大学附属病院に入院して療養にとつめた甲斐もなく、十二月十六日再び立たなかつた。同十九日南禅寺内金地院で葬儀を行い、同院に葬られた。享年五十一才であつた。

(美術史家)

# 浅井忠の足跡探訪

ヨーロッパで的一端

高橋 在久



グレー村の地図

昭和五十年八月「浅井忠とその師展」の開催が決定して、各方面へのお願ひ準備をすすめていたところ、文部省学術国際局から、ユネスコ活動促進のための、タイ、イタリア、フランス、イギリス四ヶ国の、教育、科学、文化の国際交流政策の調査などを目的にした派遣団の一員に選ばれ、十一月の約一カ月間を海外発見の旅で過す機会に恵まれた。

千葉県教育委員会の出張承認もあり、浅井忠に關した特別展の企画も進行していたので、できることなら余暇を活用して、ヨーロッパでの浅井忠の足跡を探訪しようと、多忙な期間ではあったが、美術館の資料をあさり自分なりの計画をもち、それぞれの国でなんとかゆかりの地を確認しよう、ひそかな期待を抱きながら派遣団に参加し出発した。

幸いなことには、イタリアでもフランスでも、また、イギリスでも予定した探訪が可能になり、浅井忠のヨーロッパでの足跡の一端にふれることができた。異邦人として文字どおりの探訪をなんとか実現したが、なかでも、フラン

スでは、パリの南東約八十キロのセーヌ河上流になるロアン河流域の、グレー村を中心にした浅井忠の原風景を、自分の眼で確認できたことは望外といつていい程の収穫であった。

いうまでもなく、日本洋画界の先駆者で千葉県佐倉藩士だった浅井忠は明治八年五月「當時世間一搬の風潮は、芸術の如き全く捨てて顧られず殊に青年血気の輩が、理想とする所は、執も宰相となりて大政を攪るにありき、然るに一旦青雲の志を抛ち、身を画界に投ぜんとするや、親戚朋友等の挙て非難抑制せしをも顧みず断然洋画研究の途に入りしは大に信ずる所ありしならん」と、弟の浅井達三が書いてるように画家を志したが、た



ホテル・バンテオン

しかに、明治二十二年に「春畝」を翌年は「収穫」を描き非凡な才能が注目された。もちろん、バルビゾン派の流れをくむ、詩情あふれた師フォンタネージの画風が、浅井忠の感性をゆさぶった精進の結果だが、こうして、東京美術学校の教授になりフランスに留学し、ヨーロッパ各地に足跡を残したが、とくにパリ郊外のグレー村に魅せられ滞在して、いわゆるグレー村の連作で、日本近代美術史での評価が固定した。

浅井忠は明治三十二年十月「西洋画研究ノタメ満二年仏国留学ヲ命ズ」という、文部省の辞令で翌年二月に渡欧した。四月十七日パリに到着してから、久米桂一郎らの世話でリュウ・ラファエットのオテル・サントラルに旅装を

解いたが、日本人ばかりなので、三日滞在したただけで、新海竹太郎のいたブラス・チュ・バンテオン十一番のオテル・バンテオン七階に五月一日までいた。短期間ながら滞在したオテル・バンテオンは、いまもクアルチエ・ラタンのバンテオンの西側に旧態のままであり、仰ぐと七階というのは文字どおり屋根裏の部屋という感じだったが、ここで後年まで深交を結んだ国文学者で法制史家の池辺義象との出会いがあった。詳細は隈元謙次郎著「浅井忠」を参照されたい。

浅井忠のパリでの留学生生活は「巴里日記」や「巴里寓居日記」などから知ることができ、パリでの本拠はアパニユー・マラコフ二十八番のアパルトマンで、ここには、フランスに到着して間もない五月一日から、翌明治三十四年十月グレー村に移るまで滞在しているが、この間、三回ほどグレー村を訪ねている。明治三十三年八月十二日の日記に、「村落を散歩し、小川の傍にて写真又写生す。終日野外に遊び暮して仙郷にあるの思ひあり。此地ミレーの住居せる処なり」とて干画人の



グレーの古橋

来り遊ぶもの多く、客舎にあるもの多くは画人にして……などと、グレー村での興の深さを記録している。  
こうして、明治三十四年十月一日、浅井忠は和田英作とともに、前のグレー村訪問の時の宿だったオテル・シュヴィヨンに到着し、パリの秋色とは違う意外に青い景色に感じ、なじみの赤猫ミミーと再会している。ここでの生活は十二月十九日初雪が降った日までの『愚劣日記』で、その前半を理解できるが、とにかく

く、明治三十五年三月二十一日、なお深い愛着を感じながらパリに帰るまで、オテル・シュヴィヨンに滞在し、浅井忠の名を日本近代美術史に固定させた。多くのグレー村の連作を残している。

浅井忠を魅了し名作を生んだグレー村は、田園のなかにある。昭和五十年十一月二十三日の日曜日、夕暮れが早いフランスの冬を気にしながらも、フォンテンブローの森やバルビゾン村に心ひかれながら、待望のグレー村を望見したのは午後一時を過ぎていた。

ロアン河の河岸段丘に位置するグレー村は、パリからの友人の車に乗った異邦人の私を静かに迎えてくれた。  
グレー村は単純な集落で、河に平行する二本の道路に沿った、東西三百メートル、南北一千メートルほどの地域に民家が並ぶ、小さい素朴な農村であった。  
早速、村人にグレー村の連作に描かれた橋や教会などの存

在を聞くと、手押車の村人は気軽に教えてくれたので、時間を惜しみ歩きだすと、間もなく、水彩や油彩で見られた浅井忠のグレー村の連作の原風景に直面できた。  
久しぶりに高まる心を感じたが、まず、坂道の向うに、「グレーの橋」が見えた。行く

と本体は石造で、中間路面が木で修理されてはいたが、七十余年前の水彩を十分連想することができ、その橋の上からは、西方の河辺の林の彼方に廃墟が浮かび、その林の下には石造の洗濯場が残っていて、見なれた油彩の「ロアン河洗濯場」を思い出し、描いた浅井忠の心をしのんだ。  
七十余年の歳月を忘れたというか、なかつたと錯覚した

というか、感動のままに林のなかの洗濯場に降り立って対岸を見ると、なんとそこには橋を左手にした「グレーの森」が、晴れた空を背景に葉の落ちた梢をふるわせているのが見えた。訪ねることのできた原風景を自分の眼で確認し、しばらくカメラを向けて充足感にひたつたが、時の過ぎるのが早いので、仕方なく「ギャンヌの塔、十二世紀」と標示のある「グレーの洗濯場」

の背景になつている廃墟を見てから、水彩で「グレーの塔」と名づけられた村なかの教会を訪ねた。西側に小学校があったが、その前から教会の塔を見あげたり、カメラのシャッターをきつていたら、不意に鐘楼の鐘が鳴り出した。歓迎の鐘のように錯覚したが、実は塔の時計の針は午後三時をさしていた。

グレー村の探訪はこうして可能になったが、浅井忠が宿にしたオテル・シュヴィヨンの名が消えていたことは残念でならなかった。  
それでも、村のあちこちを歩きながら、千葉県立美術館

蔵のフランスにおける浅井忠らの句会、外面笑会の記録である寒月、水仙を季題にした十句互選句帳の「寒月や古城の上を天狗飛ぶ」とか「水仙や薬局に並ぶ薬瓶」といった、空助すなわち浅井忠がグレー村で、和田英作、中村不折、美濃部達吉などと、夜をあかして苦吟したという文芸の風土まで理解できたことは、グレー村探訪の余録というか、矢張り大きな収穫のひとつであり、機会を改めてこのことは詳述したいと期している。  
夕暮れにせかされるように



夏目漱石下宿



バルビゾンの画家の宿

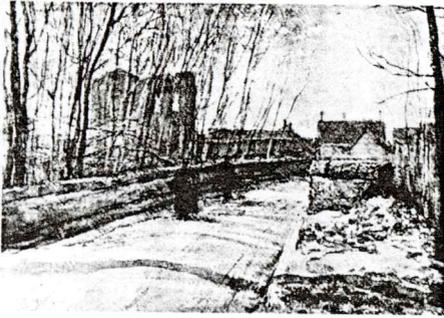
去りがたいグレー村を離れたが、ユネスコ関係の公式の日程のない日は、こうして、さらにフォンテンブローの森やバルビゾン村を訪ね、また、イギリスではロンドンの南西部クラブハム・コンモンの一画、ザ・チェイス八十一番の浅井忠が帰国の途中寄ったという、夏目漱石の下宿を訪ねたりして、得がたいヨーロッパの旅を、私的には浅井忠の足跡探訪をテーマに有効に過ごすことができ、ありがたく感じている。

(副館長)

管理棟完成記念特別展

# 浅井忠とその師弟展

3月2日(火)～4月11日(日)  
月曜日休館



日本の近代洋画は、明治初年における西洋絵画との本格

## 浅井忠とその師弟展

3月2日～4月11日 千葉県立美術館

の出合いによって急速な発展を見るが、明治九年(一八七六年)工部美術学校の開設によって、それまで各画塾で学んでいた俊才たちがここに入学し、教師として明治政府から招聘されたイタリア人画家アントニオ・フォンタネージについて本格的に洋画の技法を習得することになった。フォンタネージは僅か二年にして日本を去るが、その弟子たちは十一字会を結成し、これを母体として明治二十二年には日本最初の洋画団体の明治美術会が誕生した。

浅井忠はこの明治美術会の中心的な存在で、現在重文に指定されている「春畝」「収穫」も明治美術会の展覧会に発表されたものである。黒田清輝とともに東京美術学校の教授となった浅井は、やがてフランス留学を果したが、画家としての天賦の才能はここで更に開花し、生涯の頂点をなす名作を残した。帰国後、京都高等工芸の開校に際して懸望されて教授になるが、一方では、関西美術院の指導者として、安井曾太郎、梅原龍三郎等多くの逸材を育てることにもなった。又生涯を通じて美術の教育者として、教科書の出版などにも取りくんだ。

浅井は、日本美術史の上で記念碑的な名作を残したのもとより、近代洋画の発展につくした業績は永久に消えることはありません。昭和五十一年は、浅井忠生誕二〇周年にも当り、そこで千葉県立美術館では、もつともゆかりの深い当地において、浅井の作品や関係資料とともに、師である。黒沼槐山、フォンタネージ、弟子である、都鳥英喜、倉田白羊、石井柏亭、齊藤与里、黒田重太郎、安井曾太郎、津田青楓、霜鳥之彦、梅原龍三郎等の作品二〇〇点余を展示して、その偉大な業績をふり返って見ることにしました。

## 近代房総の美術家たち-5-

# 藤野天光展

5月18日(火)～6月27日(日)  
月曜日休館



前回の石橋・若木展に続きシリーズの第5回として、一昨年急逝した彫塑家、藤野天光の芸術とその業績を展覧いたします。

多くの大作を残しました。代表作として、「銃後工場の護り」(昭和13年文展特選、同14年アメリカ万博に出展)、「感激」(同29年アジアオリピック出品)、「あ、青春」(同37年日展、文部大臣賞)、「光は大空より」(同40年日展、芸術院賞)、若潮国体モニュメント(同48年)などがあります。

昭和43年、声帯摘出という大手術をした年も、病を克服して日展に大作を発表、気力に満ちた創作活動をしました。また、天光は、日展理事、日本彫塑会常務理事、千葉県美術会会長兼理事、このほか多くの要職を歴任、昭和40年には、県文化功労者として知事表彰を受けました。さらに、県立美術館の建設促進には、死の直前まで積極的に献身し、死後、従五位勲三等瑞宝章が贈られました。

新収蔵品紹介

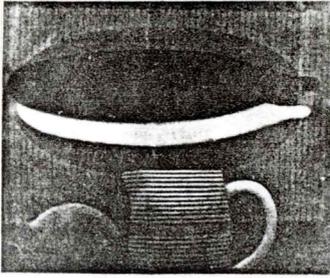
50  
11  
51

遠藤健郎作「朝市」



浜口陽三作

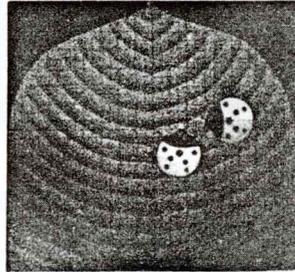
「したびらめ」(銅版画)



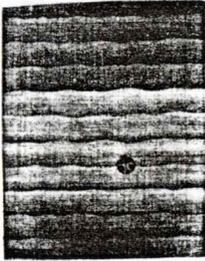
「一九〇と一匹」(銅版画)



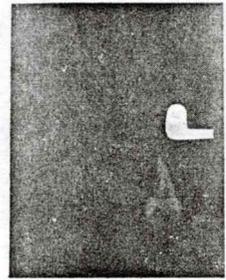
「二匹のテント虫」(銅版画)



「テント虫」(銅版画)



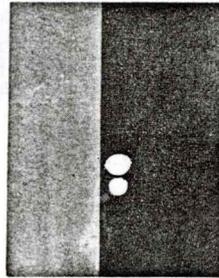
「赤いパイプ」(銅版画)



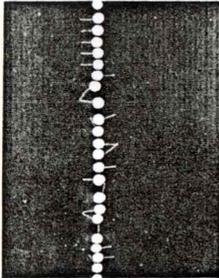
「テーブル掛けとサクランボ」(石版画)



「くるみ」(石版画)



「二六のサクランボ」(石版画)



なお、次の作品が寄贈  
されました。ここに厚  
く御礼申し上げます。

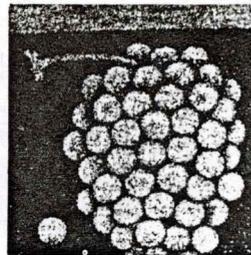
昭和50年12月26日

ヤマサ醤油株式会社より

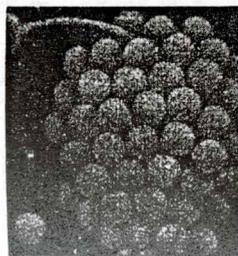
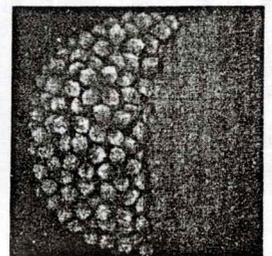
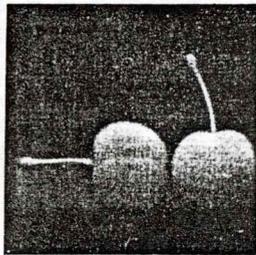
「浜口陽三版画集」

オリジナルパステル画

1枚



銅版画6枚



《美の根》

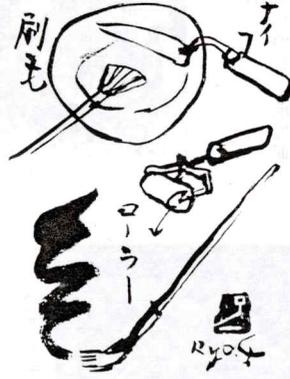
辯

笹岡 了一

雪舟だったか、幼ない頃先生にいたづらを叱られて柱に縛られた。泣きながら

んでゆくに都合がよいようだ。

ペインティングナイフも使うが、これは塗るよりも押えたり、描いたものを削ったりに使うので、食事の時のナイフとフォークのようだ。画面が大きくなると日



床に落ちた涙を足の指で鼠を描いたらその鼠が走り出したという話がある。余程絵がうまかったのだろう。油絵は描くものか塗るものか、私は絵は描くもので塗るものにあらず等と達人らしいことは言わないが、筆はどうも柔らかい腰の弱い、どちらかという穂の長いものがぐんぐん描き込

本画の刷毛や謄写版に使うローラー等も使う。これは矢張り描いた後を押えたり大きな色面の中の複雑な筆跡を消したりする。筆はどうも硬い豚毛等は筆觸に絵の具がたまって私には困るようだ。併し所詮完成したと思った時は、ヤレヤレやと絵が解たという瞬間だ。筆や道具の故ではない様だ。(洋画家)

浅井忠関係参考文献

単行本

A Pictorial Museum of Japanese Manners and Customs

浅井忠・柳源吉共著

明治十七年

黙語図案集 黙語会編 明治四十一年 芸艸堂

黙語日本画集 黙語会編 明治四十一年 芸艸堂

木魚遺響 黙語会編 明治四十二年 芸艸堂

黙語西洋画集 黙語会編 明治四十二年 芸艸堂

浅井忠 石井柏亭著 昭和四十四年 芸艸堂

私人としての浅井忠(「画井房棟筆」) 黒川重太郎著 昭和十七年 湯川弘文社

浅井忠の京都来住(「京都洋画の黎明期」) 黒田重太郎著 昭和二十二年 高桐書院

浅井忠(「近代日本美術全集」三卷) 東都文化交易 昭和二十九年

浅井忠(「現代世界美術全集」第十一卷) 梅原龍三郎著 昭和二十九年 河出書房

浅井忠(「近代画家群」) 矢代幸雄著 昭和三十年

新潮社

浅井忠(「現代日本美術全集」第二卷) 今泉篤男著

昭和三十年 角川書店

浅井忠(「近代の洋画人」)

今泉篤男著 昭和三十四年 中央公論美術出版

浅井忠(「日本近代絵画全集」第一卷) 隈元謙次郎著

昭和三十八年 講談社

浅井忠(「日本の名画・洋画百選」第一卷) 乾由明

昭和四十年 三一書房

「浅井忠名作展」図録 昭和四十四年十一月一日〜十二月七日 プリチストン美術館

浅井忠 隈元謙次郎 昭和四十五年 日本経済新聞社

浅井忠(「近代の美術」五) 乾由明編 昭和四十六年 至文堂

「浅井忠・黒田清輝名作展」図録 昭和四十六年三月二日〜十四日 岡山県総合文化センター

浅井忠の生涯と芸術(「現代日本美術全集」第十六卷) 鈴木健一 昭和四十八年 集英社

「浅井忠とその師弟展」図録 昭和五十一年三月二日

日 四月十一日 千葉県立美術館

従征画稿 四冊 浅井忠 明治二十八年 春陽堂

彩画初歩 二種 木版各十二枚組 石版六冊 浅井忠

明治二十九年 吉川弘文館

彩画入門 浅井忠 明治二十九年 吉川弘文館

月瀬紀行・薫世界 一冊 浅井忠・池辺藤園 明治三十八年 芸艸堂

当世風俗五十番歌合 二冊 浅井忠・池辺藤園 明治四十年 吉川弘文館

吉野紀行・錦世界 一冊 浅井忠・池辺藤園 明治四十二年 吉川弘文館

訂正自在画臨本 六冊 浅井忠 明治四十二年 金港堂

中等鉛筆画手本 三冊 浅井忠 明治三十九年 吉川弘文館

新編自在画臨本 八冊 浅井忠 明治三十九年 金港堂

水彩スケッチ 一冊 浅井忠 明治三十九年 吉川弘文館

中学習画帖 三冊 浅井忠 明治三十三年 吉川弘文館

中学画手本 二冊 浅井忠 明治二十八年 金港堂

定期刊行物

巴里消息 浅井忠 「ホトトギス」 明治三十年一月月号

（第四卷 第一号）

巴里万国博覧会評 浅井忠

「時事新報」 明治三十四年八月八日号

巴里博覧会に於ける浅井忠氏の説を読む 金嶺 「絵画叢誌」 明治三十三年十月二十五日号

戦争と絵画 浅井忠 「美術新報」 明治三十七年三月二十日号

浅井氏の戦争画談 浅井忠 「日本美術」 明治三十七年七月号

浅井画伯逸事 小山正太郎 「報知新聞」 明治四十年二月十七日付

浅井先生 中村不折 「日本美術」 明治四十一年六月号（第百十二号）

浅井先生の画風 中村不折 「絵画叢誌」 明治四十一年五月号

故浅井忠氏追悼号 石川欽一郎 和田英作 都鳥英喜 石井満吉 「方寸」 明治四十一年二月号（第二卷第二号）

洋画家浅井忠の遺作 瀧拙庵

「国华」 明治四十一年七月号（第二百十八号）

洋画の京都と浅井忠 大内秀磨 「美術之日本」 大正四年三月号

浅井先生 西村一草 「ホトトギス」 大正十一年五月月号

浅井忠先生の回想 津田青楓 「美術新論」昭和二年七月月号

浅井忠のこと 黒田重太郎 「中央美術」（同会）二十一年 昭和十年

画学類纂と従征画稿 石井柏亭 「学燈」 五十一年八月 昭和二十八年

洋画の先駆者浅井忠 渡辺包夫 「房総展望」 六一七 昭和二十八年

浅井忠（日本洋画家伝） 今泉篤男 「中央公論」 昭和二十九年一月号（第七百八十四号）

浅井忠一人と作品 黒田重太郎 「みづゑ」 昭和三十年一月号（第五九三号）

浅井忠と漱石 永井信一 「萌春」 昭和三十三年二月号（第五十二号）

浅井忠の子規居士弄丹青図について 土居次義 「京都工芸繊維大学工芸学部研究報人文」 昭和三十三年十月号（第七号）

浅井忠筆「グレーの秋」 隈元謙次郎「MUSEUM」 三十四年八月号（第百一号）

浅井忠筆東宮御所壁飾下絵と関係資料について 大橋乗保 「京都工芸繊維大学工芸学部研究報人文」 昭和三十五年十二月刊（第九号）

浅井忠先生の思い出 本多元俊 「房総展望」 十五一年 昭和三十六年

浅井忠の子規居士弄丹青図 土居次義 「萌春」 昭和三十六年十一月号（第九十六号）

浅井忠の芸術―自然な情感の流露とインターナショナルな目（対談近代日本作家研究）中谷泰・針生一郎「美術手帖」昭和三十七年四月号（第二〇二号）

浅井忠（洋画家の消息集覧六）喜田幾久夫 「日本美術工芸」 昭和三十七年二月号（第百八十一号）

浅井忠「伝通院」（東京美術散歩八）（K）著 東京新聞 昭和三十七年九月二十八日

晩年の浅井忠―近代美術館京部分室の浅井忠展にちなんで― 今泉篤男 「三彩」 昭和三十九年十月号（第百七十八号）

都鳥家における浅井忠の遺作について（作家研究）大橋乗保 「三彩」 昭和三十九年十月号

浅井忠・近代洋画のパイオニア 乾由明 「みづゑ」 昭和三十九年十月号（第七百十六号）

都鳥家における浅井忠の遺作 大橋乗保 「京都工芸繊維大学工芸学部研究報人文」 第十三号（昭和四十年）

浅井忠と黒田清輝 乾由明 「美術手帖」 昭和四十一年七月号（第二百七十号）

浅井忠と池辺義象 永井信一 「萌春」 昭和四十一年二月号（第百四十一号）

浅井忠「旅順戦後の搜索」（絵で見る明治百年・三）河北倫明 「芸術生活」 二百十号 昭和四十二年

浅井忠の芸術と「やに派」の画家たち（一）（四） 外山卯三郎 「美術クラブ」 十八―三六昭和四十四年

浅井忠「収穫」（美の美） 嘉門安雄 「日本経済新聞」 昭和四十四年十月三十日刊

浅井忠「グレーの秋」（美の美） 隈元謙次郎 「日本経済新聞」 昭和四十四年十一月七日刊

浅井忠「武士の山狩」 隈元謙次郎 日本経済新聞 昭和四十四年十一月二十四日刊

浅井忠名作展（展覧会批評） 田近憲三 東京新聞 昭和四十四年十一月八日夕刊

浅井忠名作展（展覧会批評） 寺田千壘 東京新聞 昭和四十四年十一月二十八日夕刊

浅井忠のこと（特集・浅井忠の芸術） 黒田重太郎 「三彩」 昭和四十五年一月号（第二百五十三号）

浅井忠ノート（特集・浅井忠の芸術） 佐々木静一 「三彩」 昭和四十五年一月号（第二百五十三号）

浅井忠の写実表現について 原田実 「MUSEUM」 昭和四十五年四月号（二百二十九号）

近代リアリズムの創始―浅井忠をめぐって― 乾由明 「世界」 昭和四十五年九月号

浅井忠の水墨山水図 土居次義 「茶道雑誌」 昭和四十五年 三四―九

浅井忠あれこれ 土居次義 「日本美術工芸」 昭和四十五年十二月号（三百八十七号）

浅井忠「武士の山狩」 隈元

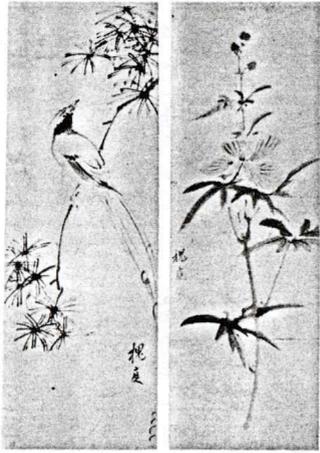
# 槐庭画帳

浅井 忠

1856~1907

浅井 忠は江戸木挽町佐倉藩邸内に生まれ、七才頃まで日本

橋浜町の上屋敷に住んだが、その頃から絵を描くことを大変好んだようである。その後佐倉に移り住んでから一時期藩の画家である黒沼槐山について日本画を学び槐庭と号した。その時の練習画帳と言ふべきものがこの槐庭画帳である。槐山に学ぶことになったのは、たまたま彼の描いた紙鳶の絵をみた漢字の先生が彼の絵画の才能を認め、入門を



すすめたためと言われている。この画帳は本来一枚ずつあった練習画が後に一つにまとめられたものであり、六十余点の絵がおさめられている。ほとんど花鳥画である。これらは師の手本を忠実に写したものとと思われるが、その筆致は年令のわりには優れており、浅井の天分を感じさせるに十分である。浅井は近代洋画の先覚者として黒田清輝と共に日本美術史上に位置しているが、洋画の他にも日本画、彫塑、工芸、図案等に才能を発揮した。なかでも日本画は数多く描かれた。槐庭画帳は浅井の画道の一時期を示す非常に貴重な資料と言える。  
(藤川正司)

## 講演会

3月20日(土) 2時より

「浅井忠の芸術」

講師 隈元謙次郎氏  
(美術史家)

4月3日(土) 2時より

「浅井忠とグレー村」

講師 高橋 在 久  
(副館長)

## 解説会

3月6日・13日・27日

4月10日

の各土曜日2時より行います。

## 「お知らせ」

同校は、六年前に一度受賞している。美術専科の教諭が一人もいないにもかかわらず、割ばしの先を削って墨で一氣に描く方法を編み出し、今日の栄冠を獲得した。

## 団体展

▼第7回千葉市民美術展

3・13 ~ 3・28

無料

▼弥生展

3・30 ~ 4・4

無料

▼第一回県民写真展

4・6 ~ 4・18

無料

▼第2回歩会彫刻展

4・13 ~ 4・25

無料

▼千葉工芸会展

4・20 ~ 5・2

無料

▼白扇会展

5・11 ~ 5・16

無料

▼千葉二科展

5・25 ~ 5・30

無料

一宮小学校、二度目の教育美術展高松宮賞を受ける。

バス運行の見通し  
開館以来、交通機関がなかったため利用者に不便をかけていたが、美術館友の会はじめ美術愛好家などの署名運動の実が結んで、桜の花が咲く頃にはバスが開通する見通しとなった。

## 日誌抄

50年11月~51年2月

- 11月 28日 2時より友の会役員会を開く
- 12月 2日 第20回子ども県展始まる 展示点数四一七九点
- 12月 12日 友の会機関紙「しおさい」2号発行
- 12月 20日 石橋武治・若木山展始まる。展示点数石橋武治四十一點 若木山十八點
- 1月 27日 御用納 年末・年始休館に入る。
- 1月 5日 御用始
- 1月 6日 登龍社・宮坂会書道展始まる。展示点数二六六點
- 1月 10日 2時より石橋武治・若木山展の解説会を行う。米田学芸員
- 1月 13日 千葉県大学美術連名展初まる。展示点数百四十六點
- 1月 21日 千葉大学卒業制作展始まる 展示点数七十六點
- 2月 2日 管理棟工事の都合により 29日まで臨時休館